

Basic Research on the Academic Motivation of Youth : Analysis Based on College Students' Motivation for Choosing Friends, Self-esteem, and Assumed Self-competence

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾形, 和男, 増南, 太志 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1100

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



青年の学習動機づけに関する基礎的研究

— 大学生の友人選択動機づけ、自尊感情、仮想的自己有能感に基づく分析 —

Basic Research on the Academic Motivation of Youth

Analysis Based on College Students' Motivation for Choosing Friends, Self-esteem, and Assumed Self-competence

尾形和男・増南太志

OGATA, Kazuo MASUNAMI, Taiji

大学生の学習への取り組みは学生生活を左右する上で重要である。学習動機づけに深くかかわる要因として、友人選択動機づけ、自尊感情、仮想的自己有能感、を取り上げ動機づけの自己決定理論を基礎とし調査によって関連性を検討した。

学習動機づけは外発的なものから内発的なものに変化するのでクラスタ分析に基づき学習動機づけの状態を確認したところ、Ⅰ「動機混在型」、Ⅱ「同一化型」、Ⅲ「外発的動機づけ型」、Ⅳ「自律的動機づけ型」の4クラスタが確認された。

それぞれ4クラスタに友人選択動機づけ、自尊感情、仮想的自己有能感がどのように関連しているか、一元配置分散分析によって検討を加えた。

その結果、Ⅳ「自律的動機づけ型」の学習動機づけが内発的なクラスタに所属する学生は友人選択動機づけは内発的なものに近く自己有能感が高いことも合わせて示され、学習動機づけを促すうえで友人選択動機づけと自尊感情の重要性が示唆された。

はじめに

近年、大学生の学習意欲の低下や目的意識の希薄化が指摘されており（中央教育審議会、2008）、保育士を養成する学校においても、同様の課題が報告されている（川俣・川俣・永渕・圓入・増田・那須、2015；小山・村野、2017）。

これまで、友人関係が学習意欲などの学習面にどのような影響を与えるのかが検討されてきており、例えば、学習に対する意欲や学習達成度に対し、友人関係を形成する際の動

機づけが強く関係することが指摘されている（Berndt, 1999；Guay, Boivin, & Hodges, 1999；佐藤, 2013）。また、大学生活においての対人関係のあり方は、学生生活そのものに大きな影響をもたらすとともに、将来の職種に必要とされるコミュニケーション能力、共感的能力の育成など重要な能力が培われるという点でも重要であるため、良好な友人関係を築くことは大学生にとって不可欠なことと言える。

岡田（2008）は、友人関係と学習の関連について検討し、学習と友人関係に対する自律

キーワード：青年、学習動機づけ、友人選択動機づけ、自尊感情、仮想的自己有能感

Key words : youth, academic motivation, motivation for choosing friends, self-esteem, assumed self-competence

的な動機づけが、友人との学習活動（例、友人に援助を求めたり、学習課題に協同的に取り組む）の生起に影響する可能性を示した。この研究では、学習への自律的な動機づけと友人形成の自律的な動機づけに注目しているが、その理論的背景として、動機づけを自律性の観点からとらえた自己決定理論（self-determination theory；Deci & Ryan, 1985；Ryan & Deci, 2000）が取りあげられている。

自己決定理論は、内発的動機づけと外発的動機づけを統合的にとらえ、自己決定（自律性）の程度という連続体のものとしてとらえる理論である。すなわち、最も自律性が低く外発的動機づけに対応する「外的調整」から、「取り入れ的調整」「同一化的調整」へと自律性の程度が高まり、最後が「内発的動機づけ」に至る連続性のあるものととらえているのである。このうち、「外的調整」は、外的な報酬や罰、他者からの働きかけによって行動が開始されるもので、行動の理由が完全に個人の外側にあるものである。「取り入れ的調整」は、明らかな外的働きかけはないが、他者から統制されている感覚を内面にもっており、不安や義務の感覚から、あるいは自己価値を維持したいために行動するものである。「同一化的調整」は、行動がもつ価値を認め、個人的に重要であるからなどの理由で自発的に行動がなされるものである。「内発的動機づけ」は、興味や楽しさなどのポジティブな感情によって動機づけられ、行動の理由が完全に個人の内側にあるものである。

自己決定理論に基づいて、友人関係への動機づけ尺度（岡田, 2005）と学習動機づけ尺度（安藤, 2005；速水・田畑・吉田, 1996）が作成されている。友人関係への自律的な動機づけは、向社会的行動や自己開示などの友人

への積極的な働きかけを促進し（岡田, 2005, 2006）、学習に対する自律的な動機づけは、適応的な学習方略や対処行動の使用を促進するとともに（Hayamizu, 1997；Yamauchi & Tanaka, 1998）、大学への肯定的な認知に影響する（安藤, 2005）とされる。いずれの場合でも、自律的な動機づけであることが、良好な人間関係や学業に影響すると言える。

岡田（2005）は、動機づけの自律性の程度を表す指標として、Relative Autonomy Index（RAI）を用いている。この指標は、「外的調整」「取り入れ的調整」「同一化的調整」「内発的動機づけ」を一つにまとめ、自律性の高い人ほど正の高い数値を示し、低い人ほど負の高い数値となる。このRAIを用いた分析は、4つの動機づけを1つの指標としてまとめることにより、他の尺度との相関分析等を行ううえで有効な指標である。その一方で、新垣・都築（2016）は、自律的動機づけか統制的動機づけかの指標を用いた相関分析よりも、動機づけプロフィールを用いる方が、どのようなプロフィールの学生がどのくらいいるのか、プロフィールごとの対応などを詳細に検討できるためメリットがあると述べている。

本研究では、保育・教育系の大学生を対象に、友人関係動機づけ、学習動機づけの特徴を明らかにする。将来、保育や教育に携わるつもりでいる学生にとって、資格・免許に必要な専門知識・技術を獲得するための学習に意欲的な姿勢をもつことは重要である。対象となる子どもや保護者との関わりにおいて、表面的な知識では不足であり、様々な理論の獲得や理論と実践の結びつきを、学生自身が積極的に行っていく必要があるからである。また、子どもに対する責任の重さや自身の知識・技術の不足のために、「向いていないので

はないか」との不安を経験するものも少なくない。そのような場合に、良好な友人関係はお互いを支え合うのに不可欠な要素になると考えられる。したがって、保育・教育系学生に対して、友人関係に対する動機づけや学習に対する動機づけの特徴を明らかにすることは、学生指導を行う上で意義があると考えられる。本研究では、多様な学生がいることを想定し、学習動機づけのパターン（動機づけプロフィール）ごとの友人関係動機づけの特徴を詳細に検討する。

学習動機づけ、友人関係動機づけとともに、これらに影響する要因として、自尊感情と仮想的有能感に着目する。自尊感情が低く、仮想的有能感が高い人は、学習動機づけにおける自律性が低い傾向があるとされる（速水・小平, 2006）。ここで、仮想的有能感とは、自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚を表し、自尊感情は、自分自身による「自分」への肯定的評価や、自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚である（速水・木野・高木, 2004）。速水ら（2004）は、他者を軽視する傾向の高さと自尊感情の高さを分類し、自尊感情が低く、他者を軽視する傾向がある人を仮想的有能感に位置付けている。

佐藤（2013）は、このような自尊感情及び仮想的有能感と、学習動機づけ及び友人関係動機づけの関係を、看護学生を対象として検討しており、自尊感情が自律的な学習動機づけに影響することと、仮想的有能感が統制的な友人関係動機づけに影響することを示した。

本研究では、学習動機づけのパターンが異なる者同士で、友人関係動機づけや自尊感情、仮想的有能感がどのように関連しているかを

合わせて検討する。

方法

1. 被調査者

埼玉県内の保育・教育系4年生大学（A大学）の学生155名（2、3年生）を対象とし、質問紙調査を実施した。女子学生が111名、男子学生が44名であった。

2. 調査内容

①友人関係への動機づけ尺度（16項目）

岡田（2005）による友人関係への動機づけ尺度を用いた。この尺度は、自己決定理論における内発的調整、同一化的調整、取り入れ調整、外的調整について、それぞれ4項目ずつ質問項目が設定されており、計16項目で構成されている。また、友人関係動機づけのRAIを算出し（ $RAI = (-2 \times \text{外的}) + (-1 \times \text{取り入れ}) + (1 \times \text{同一化}) + (2 \times \text{内発})$ ）、自律性の高さを調べた。なお、RAIは、数値が高いほど自律性が高く、数値が低いほど統制的であることを意味する。

②学習動機づけ尺度（14項目）

安藤（2005）による学習動機づけ尺度を用いた。この尺度も自己決定理論に基づく尺度であり、内発的調整、同一化的調整、取り入れ調整、外的調整について、それぞれ3～5項目の計14項目で構成されている。また、学習動機づけのRAIを算出し（ $RAI = (-2 \times \text{外的}) + (-1 \times \text{取り入れ}) + (1 \times \text{同一化}) + (2 \times \text{内発})$ ）、自律性の高さを調べた。なお、RAIは、数値が高いほど自律性が高く、数値が低いほど統制的であることを意味する。

③自尊感情尺度（10項目）

Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の日本語版（山本・松井・山成, 1982）を用いた。

10項目で構成される質問紙である。

④仮想的有能感尺度（11項目）

速水ら（2004）が開発した仮想的有能感を測る尺度の改訂版（Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004）を用いた。11項目で構成される質問紙である。

上記①から④の各質問紙は全て、「かなりあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4件法によって回答を求めた。

3. データ収集及び倫理的配慮

調査は平成29年4月に実施した。講義を通して学生に説明し、講義終了後了承してくれた学生に調査用紙を配布し、記入後、調査用紙を回収した。説明の際には、研究の目的、個人情報への配慮、データはシュレッダー

で処理するなど個人には迷惑がかからないことを説明した。

結果

1. 各質問紙の構造化

それぞれの質問紙がどのような構造から構成されているのかを把握するために、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。

その結果①友人関係への動機づけ尺度では4因子が抽出され、それぞれ「内発的選択」「同一化的選択」「取り入的選択」「外発的選択」と命名した。各因子の信頼性は順に $\alpha = .947, .855, .771, .789$ で高い信頼性が確認された（Table 1）。

②学習動機づけ尺度については4因子抽出され、「同一化的動機づけ」「外発的動機づけ」

Table 1 友人関係への動機づけに関する因子分析結果（最尤法 promax回転後）

	Fac I	Fac II	Fac III	Fac IV
内発的選択 ($\alpha = .947$)				
友人と一緒にいるのは楽しいから	.988	-.049	.007	-.025
友人と一緒にいると楽しい時間が多いから	.900	.067	-.032	.016
友人と親しくなるのはうれしいことだから	.875	-.006	.039	.032
友人と話すのはおもしろいから	.818	.076	-.008	-.017
同一化的選択 ($\alpha = .855$)				
友人関係は自分にとって意味のあるものだから	-.053	.967	-.050	.062
友人といることで幸せになれるから	.102	.775	-.095	.107
友人と一緒に時間を過ごすのは重要なことだから	.011	.729	.156	-.110
友人のことをよく知るのは価値のあることだから	.103	.565	.086	.018
取り入的選択 ($\alpha = .771$)				
友人がいないと後で困るから	-.010	-.104	.818	-.084
友人と親しくしておくべきだから	.062	.177	.635	-.206
友人の方から話しかけてくるから	.063	-.011	.608	.111
友人がいないと不安だから	-.093	.201	.598	.033
友人関係を作っておくようにまわりから言われるから	-.061	-.251	.465	.241
友人がいないのは恥ずかしいことだから	.039	-.018	.451	.184
外発的選択 ($\alpha = .789$)				
一緒にいないと友人が怒るから	.011	.062	-.057	.934
親しくしていないと友人ががっかりするから	.001	.035	.156	.738
因子相関	Fac I	.652	.050	-.348
	Fac II		.187	-.378
	Fac III			.218
	Fac IV			

「内発的動機づけ」「取り入れ的動機づけ」の4因子を抽出した。各因子のそれぞれの α 係数は順に、.892、.843、.811、.789であり信頼性が確認された (Table 2)。

③の自尊感情は本来単因子構造として扱われていたが、探索的に同様の方法で因子分析

を行った。その結果「自己肯定感」($\alpha = .703$)、「自己存在感」($\alpha = .722$)の2因子が抽出された (Table 3)。

④の仮想的有能感については単因子構造であり、 $\alpha = 0.87$ となり信頼性が確認された (Table 4)。

Table 2 学習動機づけに関する因子分析結果 (最尤法 promax回転後)

	Fac I	Fac II	Fac III	Fac IV
同一化的動機づけ ($\alpha = .892$)				
自分のためになると思うから	.902	-.033	.058	-.003
今勉強しておかないと後で困るから	.897	.073	.041	-.081
勉強すべき大切な内容だと思うから	.757	-.021	.022	.167
勉強内容が将来役立つと思うから	.740	-.057	.021	-.027
希望する職業に必要なだから	.559	-.027	-.153	.181
外発的動機づけ ($\alpha = .843$)				
勉強しないと親がうるさいから	.049	.847	-.052	-.017
他人に勉強しろと言われるから	-.103	.814	-.064	.025
勉強しないと先生にしかられるから	.001	.718	.161	.062
内発的動機づけ ($\alpha = .811$)				
新しい知識を得るのが楽しいから	.111	.051	.889	-.288
授業の内容が楽しいから	-.044	-.050	.746	.215
勉強することが楽しいから	-.148	-.006	.583	.363
取り入れ的動機づけ ($\alpha = .789$)				
良い成績を取りたいから	.024	-.135	-.012	.800
勉強しないと不安だから	.103	.128	.026	.573
学生なので勉強するのがあたりまえだから	.121	.163	-.097	.534
因子相関	Fac I	-.044	.171	.423
	Fac II		.062	.171
	Fac III			.519
	Fac IV			

Table 3 自尊感情に関する因子分析結果 (最尤法 promax回転後)

	Fac I	Fac II
自己肯定感 ($\alpha = .703$)		
私はいろいろな良い素質を持っている	.857	.170
私は人並みには価値のある人間である	.686	-.074
私はだいたいにおいて自分に満足している	.471	-.019
私は物事を人並みにはうまくやれる	.420	-.114
自己存在感 ($\alpha = .722$)		
私は何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う*	.024	.755
私は自分のことを敗北者だと思うことがよくある*	.077	.666
自分が全くダメな人間だと思うことがある*	-.014	.589
自分には自慢できるところがあまりない*	-.289	.483
因子相関	Fac I	.323
	Fac II	

(表中*は逆転項目を示す)

Table 4 仮想的有能感に関する因子分析結果（最尤法 promax回転後）

	Fac I
仮想的有能感 ($\alpha = .87$)	
話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い	.768
知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	.737
他の人を見てると「ダメな人だ」と思うことが多い	.664
他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	.643
他の人の仕事を見てると、手際が悪いと感じる	.626
世の中には、常識のない人が多すぎる	.624
世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない	.619
今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない	.567
自分の周りには気のきかない人が多いと思う	.518
自分の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる	.513
自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りには少ない	.494

2. 学習動機づけの状況把握

学生の学習動機づけがどのような状況になっているのかを明らかにするために、「同一化的動機づけ」「外発的動機づけ」「内発的動機づけ」「取り入れの動機づけ」の各4因子のZ得点を基にクラスタ分析（Ward法、ユークリッド距離）を行った。その結果、4クラスタを抽出した。第Iクラスタは各動機共に正の高い値を示しているので「動機混在型」、第IIクラスタは「同一化的動機づけ」のみ正の値を示しているので「同一化型」、第IIIクラスタは「外発的動機づけ」のみ正の値を示しているので「外発的動機づけ型」、第IVクラスタは「外発的動機づけ」のみ負であり内発的動機づけに向かっている状況を示しているため「自律的動機づけ型」とした（Figure 1）。

3. 学習動機づけに関する各クラスタごとの友人選択動機づけ、自尊感情、仮想的有能感の特徴

学習動機づけの状況それぞれについて、友人選択動機づけと自尊感情、仮想的自己有能感がどのように関連しているのかを検討するために学習動機づけの状況を示す4クラスタ

を独立変数、友人選択動機づけ、自尊感情を従属変数とする多変量分散分析を行った。共分散行列の等質性検定の結果等質性が確認されなかった ($p < .002$) ので、4クラスタを独立変数、友人動機づけと自尊感情をそれぞれ従属変数とする一変量分散分析を行い、有意な値が確認された場合には多重比較（Scheffe）を行った。

学習動機づけや友人選択動機づけの指標として、RAI（数値が高いと自律的となり、低いと統制的となる）を用いて学習動機づけおよび友人関係と仮想的有能感の関連性を検討した。その結果、学習動機RAI ($r = -.31, p < .001$) と友人選択RAI ($r = -.23, p < .01$) 各々との間に負の相関があった。また、学習動機RAIと自己肯定感・自己存在感との相関関係を検討したところ有意な正の相関が見られた（それぞれ、 $r = .21, p < .05$; $r = .33, p < .01$ ）。同様に友人選択RAIと自己肯定感と自己存在感との相関関係を検討したが有意な相関は得られなかった。さらに、学習動機RAIと友人選択RAIの相関関係を検討した結果有意な正の相関が得られた ($r = .27, p < .01$)。

友人選択動機づけについては、外発的選択

はクラスタⅢがクラスタⅡよりも、同一化的選択ではクラスタⅢよりもクラスタⅠ、クラスタⅣが有意に高く、さらに、内発的選択においてはクラスタⅢよりもクラスタⅣが有意に高いことが示された。この結果から、学習動機づけが自発的な方向に進行するにつれて、友人選択の動機づけもより自発的な動機

づけに変化していることが示されている。また、自尊感情に関して自己肯定感は、クラスタⅢよりもクラスタⅠ・Ⅱ・Ⅳが有意に高く、外発的な学習動機づけのグループでは他のクラスタよりも自尊感情が低いことが示されている。同様に自己存在感についてはクラスタⅠはクラスタⅣよりも有意に低く、外発的な

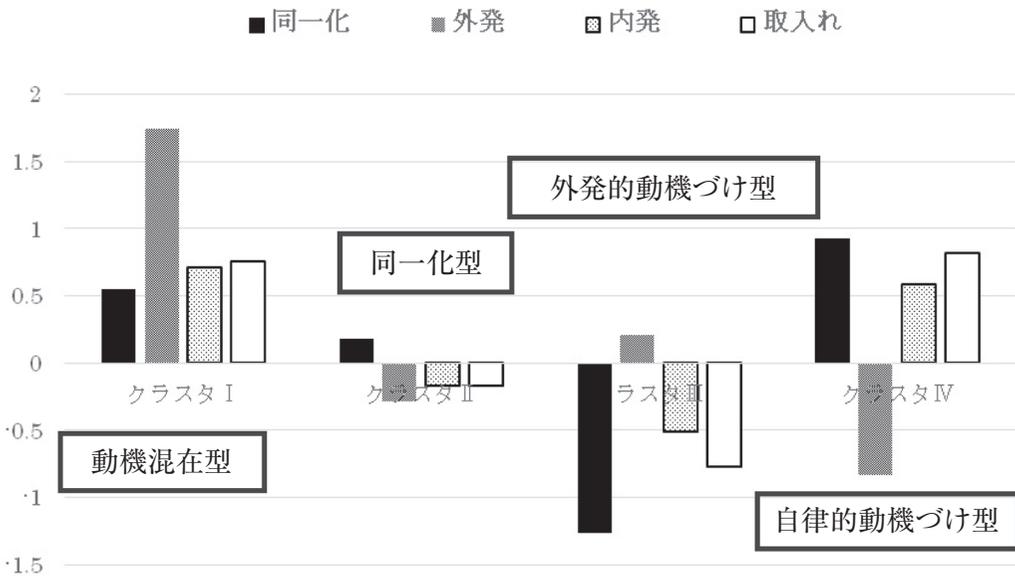


Figure 1 学習動機づけのクラスタ分析

Table5 学習動機づけのクラスタと友人選択動機・自尊感情・仮想的自己有能感

	クラスタⅠ (17名)	クラスタⅡ (55名)	クラスタⅢ (39名)	クラスタⅣ (28名)	F 値	多重比較
(友人選択)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)		
内発的選択	3.78 (.41)	3.71 (.619)	3.44 (.59)	3.79 (.42)	3.86*	Ⅲ < Ⅳ
同一化的選択	3.60 (.48)	3.48 (.60)	3.17 (.59)	3.60 (.50)	4.92**	Ⅲ < Ⅰ, Ⅳ
取り入れの選択	2.59 (.57)	2.32 (.59)	2.45 (.68)	2.44 (.54)	1.06	
外発的選択	1.50 (.75)	1.26 (.42)	1.55 (.56)	1.23 (.48)	3.96*	Ⅱ < Ⅲ
(自尊感情)						
自己肯定感	2.76 (.82)	2.51 (.52)	2.13 (.52)	2.69 (.50)	8.56***	Ⅲ < Ⅰ, Ⅱ, Ⅳ
自己存在感	1.97 (.65)	2.37 (.71)	2.33 (.54)	2.58 (.72)	4.30**	Ⅰ < Ⅳ
学習動機 RAI	-0.06 (2.27)	2.25 (1.51)	.68 (1.51)	3.80 (1.58)	28.8***	Ⅰ, Ⅲ, < Ⅱ < Ⅳ
友人選択動機 RAI	4.72 (2.35)	5.22 (2.12)	3.76 (2.30)	5.38 (1.71)	4.49**	Ⅲ < Ⅱ, Ⅳ
仮想的自己有能感	(16名)	(53名)	(35名)	(26名)		
	2.41 (.63)	2.21 (.53)	2.29 (.49)	2.06 (.62)	1.59	

*p < .05 **p < .01 ***p < .001

(多重比較はすべて5%水準)

学習動機づけのグループは自律的な学習グループよりも有意に低いことも合わせて示された。

また、仮想的自己有能感については有効回答数のみ分析の対象としており、クラスターⅠが16名、クラスターⅡが53名、クラスターⅢが35名、クラスターⅣが26名であった。学習動機づけの状況を示す4つのクラスターごとに学習動機づけの状況それぞれについて、仮想的有能感がどのように関連しているのかを検討するために学習動機づけの状況を示す4クラスターを独立変数、仮想的有能感を従属変数とする一元配置分散分析を行ったが、有意な差は確認されなかった（Table 5）。

考察

大学生の学習動機づけに関して、友人選択動機づけとの関連性に焦点をおいた分析を行ったが、まず友人選択の動機づけと学習動機づけの全体的な関連性をみた。そのためにそれぞれの指標としてRAIに基づいて相互の相関を検討したのであるが、学習動機づけが自律的であればあるほど友人選択動機づけが自律的になることが確認された。つまり、友人選択の動機づけが自発性に基づくほど学習への取り組み方も自発的になることが合わせて示唆され、これらの結果は一連の報告（佐藤, 2013; Berndt, 1999; Guay, Boivin, & Hodges, 1999）の結果と一致しており、大学生活の上で友人選択ということが学習活動の在り方を左右する重要な要素としても存在することが示された。

これらの結果は、Deci & Ryan (1985) の自己決定理論に示される外発的動機づけ→内発的動機づけの流れが友人選択と学習の両動機づけにおいても並行して存在することを示

すものと言える。

一方、自尊感情と学習動機づけの関連性について検討を加えたが、自己肯定感において外発的動機づけ型は動機混在型、同一化型、自律的動機づけ型の各学習動機づけよりも低く、内容的学習動機づけに近くなる程自己肯定感が高くなると同時に、自己を高く評価できることが学習動機づけを左右する要因として指摘できることがうかがえる。また自己存在感については動機混在型よりも自律的動機づけが高く内発的学習動機づけが高くなる程自己存在感が高くなることが示され、自己の存在感を高く評価できる学生ほどより自律的な学習動機づけを有していることも示されている。学習動機づけが高い程、自尊感情と友人選択の動機づけも高く、しかも、友人選択動機づけも高い場合は学習動機づけも自律的なものになることを合わせてみると、自尊感情は友人選択動機づけと同様に学習動機づけに関連性を有することが示されており、これら3変数の関連性についてはその因果関係も含めてより詳細に検討を加えることが求められる。

一方、仮想的自己有能感についても同様の分析を行ったのであるが、学習動機RAI、友人選択RAIとの間に有意な負の相関が確認された。

この結果は、速水・小平（2006）の指摘と一致する。本来仮想的自己有能感は自己と他者との関係について、自己を優位な立場として見て相手との関係性を保つ姿勢を示すものであり、基本的には相手の立場に立って相手との調和をとるように視点を念頭に置いたものではない。このことについて、小平・小塩・速水（2007）は、他者軽視傾向が強く自尊感情の低い「仮想型」の場合、対人関係に関わ

る出来事に関して日常から不安定で強い抑うつ感情、敵意感情を経験していることが多く、そのことが相手との関係に問題を生じると指摘している。したがって、本研究で得られた結果は、自尊感情が低く他者軽視傾向の高い状況を反映したものとも考えられるので、友人選択の動機づけと学習動機づけは低くなるものとも推測されるがこれについては更に検討する必要がある。

さらに、仮想的自己有能感について学習動機づけの各クラスを独立変数とする分析においては、クラス間に有意差が確認されなかった。しかし、相対的には動機混在型の得点が高く、しかも中でも外発的動機づけが一番高いことから見て、仮想的自己有能感の高い学生は、動機づけにおいては外発的動機づけに基づいた友人選択、学習活動をしている反面取入れや内発的動機づけも加わり、揺れ動きながら移行している不安定な状況にあることも推測される。つまり、自己の十分なコントロールに基づいた動機づけではなく、状況に左右されながら移行していると考えられる。このような状況がクラス間に差が見られない要因として存在するのではないだろうか。

また、自尊感情は本来個人の精神的健康に関わるものとして考えられているが、児童の場合は自尊感情に学校・勉強への親近感、クラスへの親近感が影響しており（松田・島崎, 2017）、学級適応が大きな要因として影響しているとされている。これに関連して、大学生の場合は学業成績が重要であると認知し、またその結果が満足できる場合自尊感情に影響する（井上, 1996）と指摘されている。一方で、友人関係の中で展開される最近の青年の自尊感情については、青年自身が傷つけら

れることを回避することで非拒絶感を低減し、そのことが結果として青年の自尊感情を維持するとする（岡田, 2011）指摘などあり、自尊感情の形成には複雑な要因が関わっていることが理解できる。しかも、自尊感情そのものは青年期において揺れながら自己概念を見直し、重要な自己概念を形成する契機にもなりうる（原田, 2008）のであり、その持つ意味は幅広い。

上記の考察から検討してきたように、自尊感情は学習動機づけの影響を受ける一方で、友人選択の在り方が自尊感情を左右するとする指摘（石田, 2014）において、友人関係が親密であるほど自他の類似性を高める方向で影響し、学習意欲の高い友人を持つ学生では学習意欲が高められることも指摘されている。したがって、友人選択がその後の友人関係の親密性にどのような影響をもたらすのかという視点、学業成績の結果についての認知の仕方の影響力も含めてさらに検討を加える必要があると考える。

引用文献

- 安藤史高 2005 大学コミットメントと自律性欲求・学習動機づけとの関連 一宮女子短期大学紀要, 44, 91-99.
- Berndt, T. J. 1999 Friends' influence on students' adjustment to school. *Educational Psychologist*, 34 (1), 15-28.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. 1985 *Intrinsic motivation and self-determination*. New York: Plenum Press.
- Guay, F., Boivin, M., & Hodges, E. V. 1999 Predicting change in academic achievement: A model of peer experiences and self-system processes. *Journal of Educational Psychology*, 91(1), 105.
- 原田宗忠 2008 青年における自尊感情の揺れと自

- 己概念との関係 教育心理学研究, 56, 3, 330-340.
- Hayamizu, T. 1997 Between intrinsic and extrinsic motivation: Examination of reasons for academic study based on the theory of internalization. Japanese psychological research, 39(2), 98-108.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達化学, 51, 1-8.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. 2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. Asia Pacific Education Review, 5(2), 127-135.
- 速水敏彦・小平英志 2006 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究, 14 (2), 171-180.
- 速水敏彦・田畑 治・吉田俊和 1996 総合人間科の実践による学習動機づけの変化 名古屋大学教育學部紀要. 教育心理学科, 43, 23-35.
- 井上祥治 1996 自尊感情の研究-学業成績の重要度と成績満足度の認知が自尊感情および学習意欲に及ぼす効果- 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 95.
- 石田靖彦 2014 学級内の友人関係が生徒の学習意欲に及ぼす影響 - 友人の学習意欲の高さと、生徒の有能感に着目した検討 - 愛知教育大学研究報告, 63, 137-143.
- 川俣沙織・川俣美砂子・永渕美香子・圓入智仁・増田 隆・那須信樹 2015 「保育内容総論」運営上の課題に関する研究 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 47, 217-222.
- 小平英志・小塩真司・速水敏彦 2007 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験 パーソナリティ研究, 15, 2, 217-227.
- 松田育子・島崎 保 2007 児童の自尊感情と学級適応感との関連に関する研究 - 学級における教師の働きかけの視点から - 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 450.
- 岡田 涼 2005 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討 パーソナリティ研究, 14 (1), 101-112.
- 岡田 涼 2006 自律的な友人関係への動機づけが自己開示および適応に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 15 (1), 52-54.
- 岡田 涼 2008 友人との学習活動における自律的な動機づけの役割に関する研究 教育心理学研究, 56 (1), 14-22.
- 岡田 務 2011 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究, 20, 1, 11-20.
- 小山祥子・村野かおり 2017 教育実習における実習評価と自己評価の差異に関する研究 駒沢女子短期大学研究紀要, 50, 81-89.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image (Vol. 11, p. 326). Princeton, NJ: Princeton university press.
- Ryan, R. M. & Deci, E. L. 2000 Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. American psychologist, 55(1), 68.
- 佐藤美佳 2013 看護学生の友人関係への動機づけと学習動機づけおよび自律性欲求・有能さの欲求との関連 日本看護研究学会雑誌, 36 (2), 35-46.
- 新垣紀子・都築幸恵 2016 大学生の動機づけパターンが生活スタイル・満足度・職業価値観に与える影響 (杉山武彦教授退任記念号) 成城大学社会イノベーション研究, 11 (1), 159-178.
- 中央教育審議会 2008 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/08103112/003/004.htm.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30 (1), 64-68.
- Yamauchi, H., & Tanaka, K. 1998 Relations of autonomy, self-referenced beliefs, and self-regulated learning among Japanese children. Psychological reports, 82(3), 803-816.